

藤原宮第27—6次の調査

(昭和54年5月)

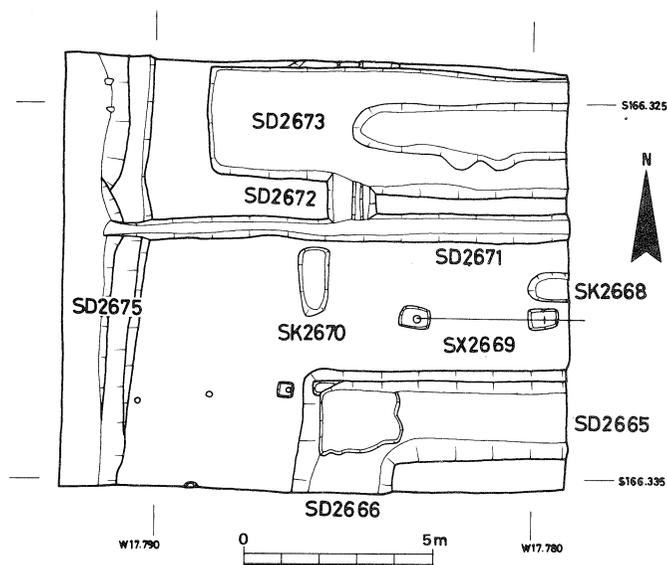
調査地は藤原宮大極殿の西北西方約380mにある水田で、藤原宮の西北部の一画を占める位置にあたる。遺構は耕土・床土下の地表から40cmの深さで検出された。遺構の大半は黄褐色粘質土層の上面で検出されたが、調査区の北東部では自然流路の堆積層である暗褐色砂層の上面で検出されたものである。主な遺構には掘立柱塀1、素掘り溝6、土壇2があり、時期的に7世紀後半のもの（Ⅰ期）と中世のもの（Ⅱ期）に大別される。

Ⅰ期の遺構は東西に並ぶ柱掘形SX2669のみである。柱間は3.3mで1間分あり、さらに東方へ続くものと推定される。柱掘形の埋土からは7世紀後半に位置づけられる須恵器が出土した。

Ⅱ期の遺構は重複関係と出土遺物からさらに3期に細分できる。Ⅱ-1期の遺構は13世紀後半に位置づけられるもので、土壇SK2668・2670がある。SK2670は調査区のほぼ中央にある土壇で、南北1.8m、東西0.8m、深さ0.1m

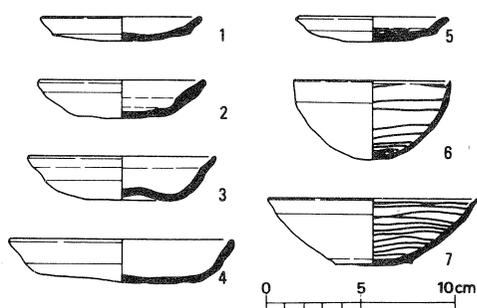
の規模である。SK2668もSK2670と同様の規模と思われる。これらの土壇からは瓦器碗、土師器皿、羽釜が出土した。

Ⅱ-2期の遺構は14世紀後半に位置づけられるもので、溝SD2665・2666・2671・2672・2675がある。SD2665は幅2.5m、深さ0.



第27—6次調査遺構配置図(1:200)

7 mの規模をもつ東西溝で、西ではほぼ直角に南折してSD2666となる。溝のコーナーでは、SD2666の西壁が溝底近くで垂直面をなし、側板をあてていたような状況を示していた。溝の堆積層は3層に大別され、上層が暗褐色砂質土、中層が灰褐色粘質土、下層が青灰色粘質土と



出土土器実測図

なる。SD2671は幅0.8 m、深さ0.4 mの東西溝で、西に流れ南北溝SD2675と合流する。SD2675は幅3 m以上、深さ1.2 mの規模である。SD2672はSD2671に合流する南北溝で、その大半はSD2673によって破壊されている。

Ⅱ-3期の遺構は15世紀に位置づけられるもので、東西溝SD2673がある。幅3.8 m、深さ0.4 mあり東方へのびるが、土坑の可能性も残る。このほかに東西・南北方向の小溝がある。これらはいずれもⅡ-3期以降のものである。

出土遺物には土器・瓦がある。土器は藤原宮期のものは少なく、中世の瓦器・土師器が大半を占めている。図示したもののうち1・4・5・7はⅡ-1期の土坑SK2668から出土した。1・4は土師器、5・7は瓦器である。2・3・6はⅡ-2期の溝SD2665から出土した。6の瓦器碗は口径8.3 cm、高さ4.2 cmあり、外面の磨きはみられない。このほかにSD2665・2666からは14世紀に位置づけられる備前焼の壺、磁器、瓦質の羽釜等が出土した。

先述したように調査地は藤原宮の北西部にあたる位置にありながらも、確実に藤原宮とされる遺構は検出されなかった。中世の遺構の密度が高いことから、藤原宮期の遺構はすでに削平されたとも考えられる。Ⅱ-2期の遺構のうち、SD2665・2666のように出土遺物も多く、かつ直角に折れ曲る溝は通常の水路とは考え難く、むしろ集落を囲む機能をもっていたのではないかと推定される。また、SD2665・2671の溝肩間は約4.3 m、SD2666・2675間は約4.5 mとほぼ等しく、この空間地を通路とみなすことも可能である。いずれにしても今後の調査を待ちたい。